

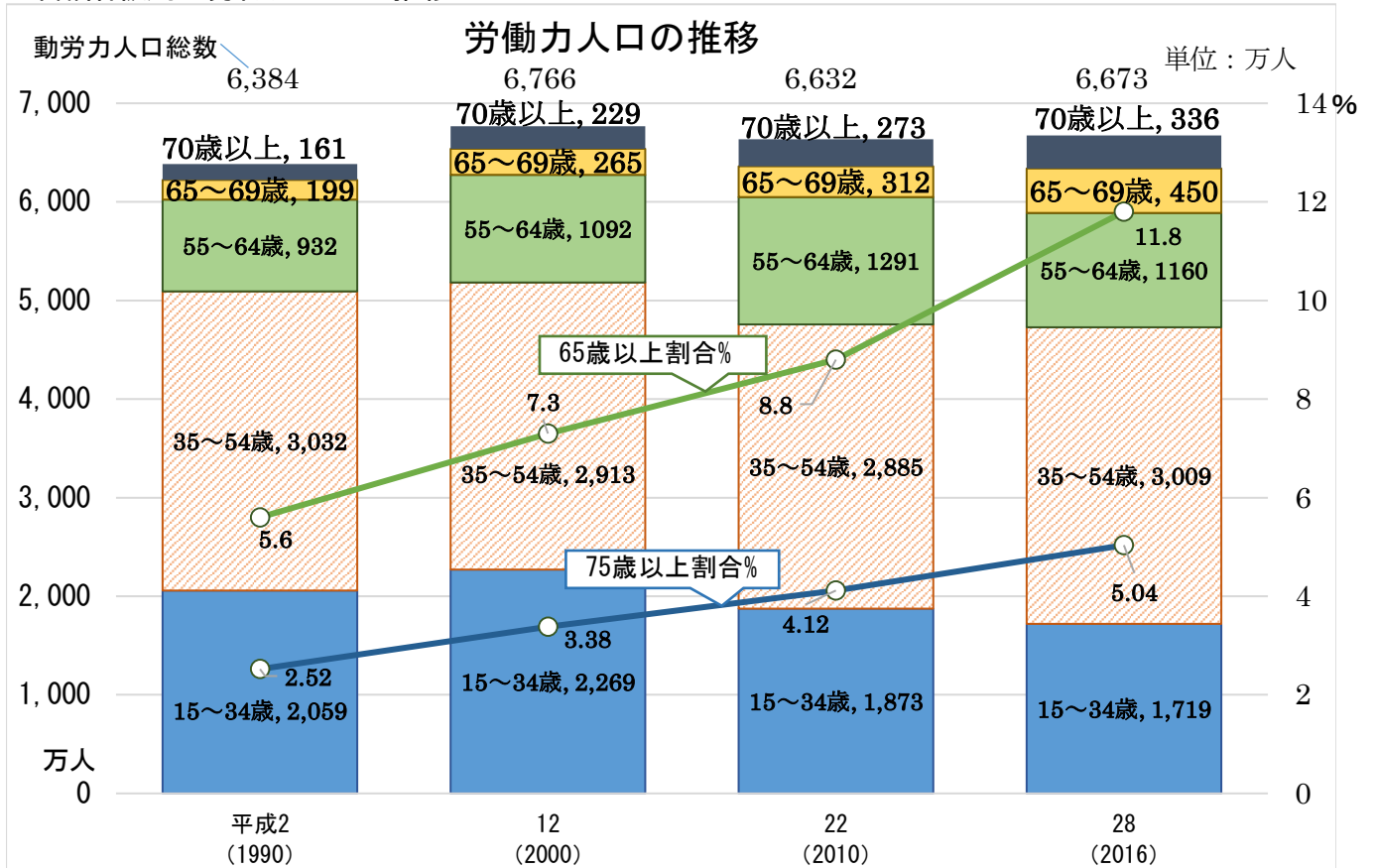
ライフデザイン通信

2020.4
Vol. 148

「高齢者の就業」を考える

超高齢社会となり、高齢者の単独世帯、夫婦のみ世帯が増え、長寿社会にも様々な変化が出ています。今月は高齢者の就業状況と労働への意識を調べて見ました。

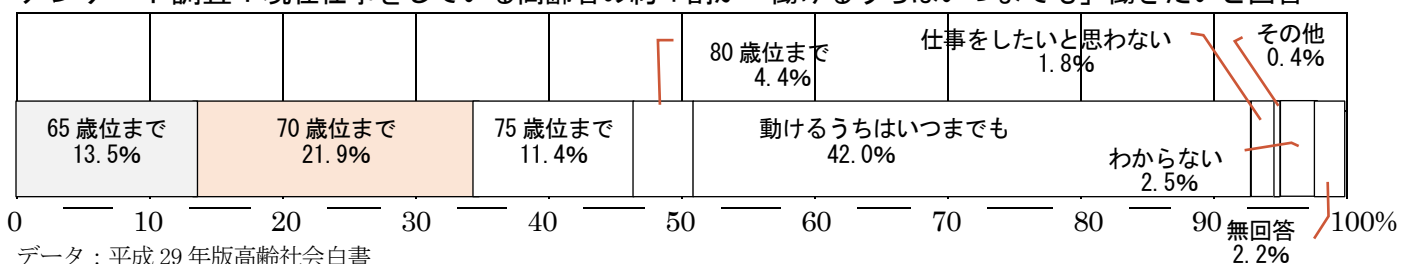
■年齢階級別 労働力人口の推移



データ：総務省「労働力調査」(年齢階級別労働力人口及び労働力人口比率) より内閣府作成したものを加工

- 労働力人口総数は2000年をピークに一旦減少、2010年から増加している
- 労働力人口のうち、65歳以上人口は1990年から2016年の26年間増加し続け、65~69歳人口は251万人、75歳以上人口は175万人増加、15~34歳人口は2000年ピークに16年間で550万人減少している
- 1990年の労働力人口総数に占める65歳以上人口の割合は5.6%、2016年には11.8%と2倍に増加、75歳以上人口の割合も1990年2.5%、2016年には5%と2倍に増加している
- 近年、高齢者の労働意識が高まってきている

アンケート調査：現在仕事をしている高齢者の約4割が「働けるうちはいつまでも」働きたいと回答



データ：平成29年版高齢社会白書



「良書ご案内」

書籍名	定年後	著者名	楠木 新
出版社名	中公新書	発行年月	2017年4月

楠木は、大学卒業後大手生命保険会社に勤務、仕事は順調で支社長等を経験する。47歳の時に、うつ病で休職、役員を目指す社内競争から脱落することになる。医師からは「ゆっくり過ごすように」との助言だが、休職中はやることが見つからない、行く場所もないという現実と直面する。

この時から将来会社を離れた退職後のことを強く意識するようになる。復職後の50代前半から「定年」をコンセプトに2足のわらじで執筆活動を始めた。

楠木は高齢者の居場所調査のために、図書館、ショッピングセンター、住宅地の喫茶店、ハンバーガショップなど高齢者男女の居場所観測を精力的に開始する。

スポーツクラブは、午前中は高齢者施設、午後は主婦層の交流施設の役割を果たしており、もはや地域における社会的インフラとして貴重な存在となっていた。

又中高年の女性が多く学んでいるカルチャーセンターも、人と人が「つながる拠点」としてその存在価値は極めて高いものだった。

退職した人へのインタビューでは、生き生きとした生活を送っている人は15%程度であった。インタビューでは「毎日やることがなくて困っている。一番自由な今が一番しんどい」、「生活のリズムがつけられない。」「しなければならないこと、がなくなると1日の区切りが失われる」と言った声が印象的だ。



本書を読まれて共感を持たれた人は多いと思う。大半の人は「定年後」について十分な用意をすることもなくスタートを切る。

本書でサラリーマンの「定年後」に関して多くの学びを得た。このような状況はなんとなく、薄々は感じていたのだが、実は私たちにも深くかかわる「大問題」であることに気づかされた。

今後日本社会の進むべきテーマとして、「地域共生社会」が掲げられている。退職後のサラリーマンの生き方、暮らし方が「地域共生社会」実現のためのカギとなりそうな予感がする。

岩城

編集後記

今年は桜を楽しむ心が沈みます。1年間、風水害を乗り越え、きれいに咲くために準備をしてきた桜。蕾の膨らみを見ながら、「ああ！膨らんできた」と喜んでいました。

私達人間も桜も動植物は、皆 一生懸命生きています。コロナウイルスには、私達の一生懸命が伝わって、撤退してくれます様に願っています。



4月

発行所：株式会社ライフデザイン研究

所在地：〒550-0011大阪市西区阿波座1-13-13 西本町中央ビル10F

Tel 06-6538-8806 Fax 06-6538-8807 HP) <http://www.ldlabo.jp/index.php/> 編集人 河合